

青年期における協同性を測る尺度についての考察

堅田 弘行*・藤井 香里

要約

保育者養成校の学生の協同性を測る尺度として、多面的協調性尺度と達成動機測定尺度を考えた。この2つの尺度から構成される尺度が青年期の協同性を測る尺度として信頼性と妥当性があるのか検討した。因子分析によって多面的協調性尺度の下位尺度から構成される「協調性因子」、達成動機測定尺度の下位尺度から構成される「自己の挑戦・成功への期待因子」、「社会的達成への期待因子」の3つの因子を抽出した。いずれも内的整合性と妥当性が確認されたものの、調査する学年によって、協同性を測る尺度としての適正には疑念が残るものとなった。

今後、再検査を実施し、再検査信頼性を確認しつつ、この尺度を用いて養成段階における協同性を測り、学生の協同性を高める教員の働きかけについて明らかにしていきたい。

キーワード：協同性、保育者養成、教員の関わり

2023年1月6日受理（理論）

はじめに

2017年に新たな幼稚園教育要領が告示され、養成課程では新たな教育課程に添った授業が実施されている。幼稚園教育要領では、遊びを通しての総合的な指導によって培われる「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が幼児教育において育みたい資質・能力であることが説かれている。そして、それを具体的に指導する際に、どのような点に注意して指導をすればいいのを示すために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、いわゆる10の姿が示された。個々の内容はこれまで5領域によって示されていたものであり、新たな要素が加わったというわけではない。

現代は、デジタル化社会になって久しい。インターネット、パソコンやスマートフォンといったデジタル端末の急速な発展は、われわれの人間関係にも大きな影響を及ぼしている。したがって、子どもたちを取り巻く環境や人間関係の在り方も変化してきていると言える。そのような社会の変遷の中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のとりわけ、協同性はどのように育まれるだろうか。協同性は、保育所保育指針

解説では、友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになることが目的とされており、幼児期の集団生活の中でこそ育まれる重要項目である。

また、子どもたちと直接関わり、その関わりにおいて、子どもの成長・発達を援助する保育者が子どもの協同性を育むためには、それを支える基盤となる力が備わっていなければならないと考えられる。保育士や幼稚園教諭の資格・免許を取得することは、保育者としての適性を保障するものではない。養成段階を含め生活の中で、保育者自身も保育者としての専門性に磨きをかけている。特に養成段階で学生には多様な人間関係が求められる。同じ夢を志し切磋琢磨する学生同士の他、上級生や下級生との学年を超えた関わり、教員との関わり、実習やボランティアを通して保育現場で働く保育者との関わりといった多様な人間関係の中で、保育者としての専門性を身に付けていくものと考えている。その養成段階において、保育者を目指す学生の協同性を育むための基盤となる力がどのように育まれていくのか、そのために教員はどのような関わり

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

が大切になるのかを検証していきたい。

1. 先行研究の整理

1) 保育者としての成長

上田 (2017) は個々の保育者に見られる保育行為の特徴や傾向、偏りの違いのことを保育行為スタイルと呼んでいる。彼は保育行為スタイルをマリモ・モデルとして提唱している。初任保育者なりの価値観のもと、様々な経験の蓄積が社会的文脈の中で行われ、保育行為スタイルが生成され、維持されていくと述べている¹⁾。西山・片山 (2013) は初任保育者を対象に保育者効力感の向上を目指した支援プログラムを実施したところ、「人間関係」保育者効力感が支援プログラム実施前から実施後にかけて着実に上昇しており、プログラム終了後も維持されていたと示している²⁾。

2) 養成校の教育内容と学生の資質向上との関係

養成校の様々な教育課程によって、資質や能力の向上が見られたとの報告がいくつかある。高橋・小椋 (2018) は学校内の自然観察によって、自然に対する関心度の増加を示している³⁾。吉野 (2020) は造形教材の開発を目指して、授業実施後のワークシートの記述の考察によって、創造性を向上させていく過程を報告している⁴⁾。中村・甲斐 (2021) も授業の中でiPadを用いたグループワークを行ったところ、プログラミング的思考につながる教育的効果があったと示している⁵⁾。

2. 予備調査

1) 調査の目的

協同性を測る尺度について、10の姿の協同性の意味「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり、充実感をもってやりとげようになる」から2つの要素「互いの思いや考えなどを共有」、「やりとげようになる」を取り上げた。「互いの思いや考えなどを共有」ということについては登張・名尾ら (2016) が作成した多面的協調性尺度⁶⁾を利用する。多面的協調性尺度は協調的問題解決因子・調和志向因子・非協調因子・協力志向因子の4つの因子からなり、同研究において尺度の信頼性と妥当性が示されている。また「やりとげようになる」ということには堀野 (1987) が作成した達成動機測定尺度⁷⁾を用いる。この尺度は社会的達成欲求因子・個人的達成欲求因子・

挑戦・成功欲求因子の3つの因子からなり、同じく信頼性と妥当性が確認できている。この2つの尺度を合わせた質問によって、協同性を測る尺度としての信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

2) 方法

2つの尺度をランダムに並び替え、質問紙を作成した。質問紙は『質問紙デザインの技法 (2016)』⁸⁾をもとに作成し、調査対象者に直接配布し、その場で回収を行った。

3) 調査対象者

2021年度に本学に在籍する1年生 (35名) と2年生 (41名) を対象に質問紙調査を行った。1年生に対しては、回答の末尾に、卒業後の調査の内容を記し、継続して調査に協力することが可能な場合について、自身の学籍番号を記すことで了解を得たこととする旨を記載した。

4) 分析方法

得られたデータについて、Excel統計を用いて、因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行い、尺度の妥当性を検証した。因子分析の結果、負荷量が0.4未満のものは項目から除外に、再度因子分析を行った。抽出された因子に関して、クロンバックの α 係数を求めることでその信頼性を確認することとした。 α 係数は.80を超える値で十分な値と判断することとした。また、協調性と達成動機の2つの概念に関連性があることを想定し、因子分析によって多面的協調性尺度から形成される因子と達成動機測定尺度からなる因子の相関係数を算出した。相関の強さの基準は、 $|r| < .20$ をごく弱い相関、 $.20 \leq |r| < .40$ を弱い相関、 $.40 \leq |r| < .70$ を中程度の相関とした。

5) 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、質問紙に研究の趣旨や個人情報情報の遵守を記載した。また回答を求める際に、調査に協力できない場合は回答を拒否することもできる旨を伝え、調査用紙の回答をもって、調査参加への同意があるとみなした。また、質問紙はすべて整理番号に従って処理し、個人が判別できないように配慮した。

3. 結果

1) 因子分析

質問項目について一部未回答であった回答者を除いて、固有値スクリープロットを確認したところ因子3を超えると誤差が1未満であったことから因子数を3とし、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。適合度の検定によって、 $p < .001$ が示され、今回の調査におけるデータとモデルに差がないことがわかった。因子負荷量が.40未満のものを除外したところ、5回の反復によって結果が収束し23個の下位尺度からなる3因子が抽出された。第1因子はいずれも多面的協調性尺度の下位尺度からなる項目であった（協

調的問題解決因子：7項目、調和志向因子：1項目、協力志向因子：2項目）。第2因子はいずれも達成動機測定尺度の下位尺度からなる項目であった（個人的達成欲求因子：1項目、挑戦・成功欲求因子：5項目）。第3因子もいずれも達成動機測定尺度の下位尺度からなる項目であった（社会的達成欲求因子：6項目、挑戦・成功欲求因子：1項目）。各因子について、その項目から第1因子を「協調性因子」、第2因子を「自己の挑戦・成功への期待因子」、第3因子を「社会的達成への期待因子」とした（表1）。なお、回転後の累積寄与率は43.23%であった。

表1 因子分析の結果と因子負荷量（プロマックス回転、最尤法）

項目	因子 (N=75)		
	F 1	F 2	F 3
F 1 : 協調性因子 ($\alpha=.83$)			
39. 他者と意見が異なるときに両者が歩み寄れるような解決策を考える。	0.81	-0.12	0.06
31. みんなで何かをやるときには進んで協力する。	0.70	0.11	0.08
35. 相手が納得するようにきちんと説明する。	0.60	0.03	-0.04
1. どんな人に対してもなるべく相手の話を聞く。	0.56	0.12	-0.17
36. その場の状況に合わせて自分の気持ちをうまくコントロールする。	0.56	0.10	-0.11
41. 失敗してもみんなに迷惑をかけたことに気づいたら素直に謝れる。	0.53	0.23	-0.09
15. 相手の意見を出来るだけ尊重する。	0.51	0.02	-0.23
46. みんなで協力して何かをやりとげるのが好きだ。	0.51	-0.18	0.30
32. 意見が対立した相手との合意を得られるように努力する。	0.48	0.05	0.14
25. 相手との関係が悪くならないように配慮して行動する。	0.46	-0.47	0.22
F 2 : 自己の挑戦・成功への期待因子 ($\alpha=.83$)			
47. 他人から与えられたことをするより、失敗の可能性が50%あっても自分で計画してやることの方が好きだ。	0.12	0.77	-0.01
30. 私は他の会社で人に仕えるよりは50%の破産の危険があっても自分で事業を経営したい。	-0.04	0.68	0.06
10. 何か新しいことにチャレンジするのは好きだ。	0.18	0.65	-0.07
16. 他の人が以前に失敗していることでもやりたい。	0.03	0.60	-0.04
18. いつも何か目標をもっていたい	0.06	0.56	0.28
29. 何かの仕事や職業または専門の分野で第一人者になりたい。	-0.05	0.53	0.27
F 3 : 社会的達成への期待因子 ($\alpha=.82$)			
27. 何か非常に社会的に有意義なことをしたい	0.16	0.05	0.70
17. まわりの人々が賞賛してくれるようなすばらしいことをしたい。	0.01	0.06	0.68
34. 難しい仕事をうまくやりとげたと人に言いたい。	-0.10	-0.25	0.63
7. 世に出て成功したいと強く願っている。	-0.10	0.22	0.62
26. 重要な人々と知り合いになるように努める。	0.12	0.27	0.52
24. 社会の高い地位を目指すことは非常に重要だと思う。	-0.24	0.20	0.50
23. 技能や努力が必要であると一般に考えられていることをしたい。	-0.05	0.37	0.45
回転後の因子間相関		0.10	0.30
			0.35

2) 信頼性分析

内的整合性について、第1因子は.83、第2因子は.83、第3因子は.82であり、いずれも.80を超えていた。

3) 相関分析

因子間の相関について、第1因子と第3因子 ($r=.34$)、第2因子と第3因子 ($r=.42$) にやや相関がみられ、母相関係数の無相関の検定により、いずれも有意であった（表2）。学年ごとでも、1年生におい

て第1因子と第3因子 ($r = .48$)、第2因子と第3因子 ($r = .47$) に中程度の相関がみられ、同じく有意であった (表3)。2年生においても第1因子と第3因子 ($r = .27$)、第2因子と第3因子 ($r = .37$) に弱い相関がみられた。無相関の検定の結果、第2因子と第3因子にのみ有意であった (表4)。

また、因子ごとに学年ごとの因子得点の差の検定 (t検定、分散分析) を行ったがいずれの因子も学年ごとに有意な差は見られなかった。

表2 因子間の無相関の検定

	F 1	F 2	F 3
F 1	—	$p = .30$	$p = .002$
F 2	<i>n. s.</i>	—	$p = .000$
F 3	**	***	—

※ $p < .01$ の場合に「**」、 $p < .001$ の場合に「***」を記した。

表3 因子間の無相関の検定 (1年生)

	F 1	F 2	F 3
F 1	—	$p = .33$	$p = .003$
F 2	<i>n. s.</i>	—	$p = .004$
F 3	**	**	—

※ $p < .01$ の場合に「**」を記した。

表4 因子間の無相関の検定 (2年生)

	F 1	F 2	F 3
F 1	—	$p = .50$	$p = .09$
F 2	<i>n. s.</i>	—	$p = .02$
F 3	<i>n. s.</i>	*	—

※ $p < .05$ の場合に「*」を記した。

4. 考察と今後の展望

因子分析の結果、第1因子は多面的協調性尺度の非協調性因子を除く3つの下位尺度によって構成される項目であった。第2因子・第3因子にも達成動機測定尺度の挑戦・成功欲求因子からなる項目が含まれるが、項目の内容から自己の成功や挑戦を期待する項目と社会的な達成を期待する項目に分けた。それぞれの因子は $\alpha > .80$ の値を取り、十分な内的整合性をもつことが確認され、信頼性は確認された。

相関分析では、第2因子と第3因子との間に有意な相関が見られたものの、対象の学年によって異なる結

果となった。1年生は「協調性因子」と「社会的達成への期待因子」に有意な相関が見られたのに対し、2年生は「協調性因子」と有意な相関が見られた因子は無かった。サンプル数が少ないため、確かな判断はできないものの、2年生においては協同性を測る尺度として、協調性や達成動機以外の尺度の存在する可能性が考えられる。但し、表2より全体的に見ると、「協調性因子」と「社会的達成への期待因子」に有意な相関がみられることから、概ね仮説通りの結果が示されたため、妥当性の確認も行えたと言える。

今後、この尺度を用いて、再検査を実施し再検査信頼性を確認するとともに、養成段階における学生の協同性を高める教員の働きかけについて明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 上田敏文, 『保育行為スタイルの生成・維持プロセスに関する研究』, 127-129, 風間書房, 2017.
- 2) 西山修・片山美香, 「初任初期における保育者支援プログラムの個別実施とその効果」『研究集録』, 152, 1-9, 2013.
- 3) 高橋哲也・小椋郁夫, 「学校内の自然観察における『大発見を探そう』のテーマ設定が保育内容(環境)の履修学生の自然に対する関心度に及ぼす効果について」『名古屋女子大学紀要』, 64, 1-8, 2018.
- 4) 吉野泰男, 「学生の主体的思考を育てる造形教材開発」『植草学園短期大学紀要』, 21, 89-101, 2020.
- 5) 中村光絵・甲斐万里子, 「保育者養成課程におけるプログラミング的思考に基づく授業実践-ICTを活用した舞台づくり-」『和洋女子大学紀要』, 62, 75-85, 2021.
- 6) 登張真穂・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの, 「多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性」『人間科学研究』, 37, 151-164, 2016.
- 7) 堀野緑, 「達成動機の構成因子の分析-達成動機概念の再検討」『教育心理学研究』, 35, 52-58, 1987.
- 8) 鈴木淳子, 『質問紙デザインの技法 [第2版]』, ナカニシヤ出版, 2016.